第４回 ペルー国別セミナー

日　時　８年３月１３日（水）
場　所　三井ビル５０階５０５会議室

ペルーのインフォーマル・セクターと我が国の援助

富田　与　氏
四日市大学経済学部講師

内容的にきょうお話しするのは、主に首都のリマのインフォーマル・セクターということになると思います。首都のリマですが、一番最後に添付してございますグラフ・統計の一番初めの「リマの人口」というところをごらんください。

１９５０年の時点で１００万ちょっとの人口だったものが、４０年余りの間に６００万を超す人口を擁するようになってきている。ペルー全体の人口の約３０％ぐらいがリマ及びリマに隣接しますカヤオ憲法特別郡に住んでおります。その意味でリマは極めて主位性が高い都市であります。なおかつ、１９６０年代以降、急速な都市化といいますか、人口の増加が起きます。これは、この当時リマを中心に製造業が伸び始めまして、それを契機に人口がアンデスの農村地域からリマを中心とした海岸地域の方に移動してきたことによります。

そういった状況の中で、通常我々が考えているような近代部門といいますか、一般に企業活動と考えている部門への雇用の吸収がかなわずに、その外側でみずからの雇用を確保しなければいけない。言ってみれば自己雇用空間として生まれてきたのがインフォーマル・セクターであるということが言えるだろうと思います。

ただ、これは何もリマに限ったことではありませんで、途上国一般に言えることですが、リマの場合にはまさにリマのインフォーマル・セクターならではの幾つかの特徴を踏まえた上でないと、どうも議論しにくいというところがあるだろうと思います。

まず分析概念として、インフォーマル・セクターという言葉が随分複雑化してきております。また同時に、実際のインフォーマル・セクターの方も、農村から都市への人口移動の中で生まれてきたというような性質のものでは必ずしもなくなってきている。これが一つ目の基本的認識として挙げたことであります。二つ目といたしまして、このインフォーマル・セクターは、もちろん独自の機能、作用、働きを持ってはいるわけですが、ただ、フォーマル・セクターの中に吸収できなかったという意味において、いわば社会のフォーマルな部分の残余として形成してきたというところがあります。その結果、どうしても社会のフォーマルな部分の影響を非常に受けやすい性質のものであるということができると思います。

三つ目は、自己雇用空間としてのインフォーマル・セクターですが、インフォーマル・セクターという経済活動を指すのか、あるいはそこに働く労働者を指すのか、あるいは企業体の集まり、経営体の集まりを指すのか、その辺のところが判然としないところであります。実はこれには両側あるだろうと思います。経営体の集合としてのインフォーマル・セクター、それから労働者の集合としてのインフォーマル・セクター。これをどちらでとらえるかによって、どういう形でのインフォーマル・セクター支援が可能かということを考える上で、どちらの視点で見るかで幾分か差が出てくるだろうと思われます。

さて、こうした基本的な認識に立ちまして、きょうお話ししたい内容は主に二つあります。一つ目は、リマのインフォーマル・セクターがどういう雇用の構造をしているのかという側面、二

つ目は、社会のほかの部分との関係でどういう社会的機能を持っているかという側面から見ていきまして、最終的にどんな支援の方法が可能なのだろうかということをお話ししたいと思います。

まず、一般的な考え方としてのインフォーマル・セクターというのはどんなものであって、また、それの応用例として、リマのインフォーマル・セクターを考える場合にどんな見方がされているのかということをお話ししておきます。

1－3－1に掲げましたのは、これはＩＬＯの考え方に基づいて、ペルーの民間の研究機関であります「開発と参加のための研究センター」がインフォーマル・セクターの調査を行うに当たって一応の目安とした定義、これを9個挙げてあります。

労働者当たりの資本が少ない。つまり労働集約的な労働が行われてきている。それから、労働生産性が極めて低い。技術が比較的単純なものである。労働の中身として技術的な分業がいまだに未分化であって、1人の人間が幾つもの作業をこなす。それで、要求される労働の質が低い。これは、要するに高等教育を受けない労働者であっても十分に労働に耐え得るような性質の労働が要求されている。従業員の上限が１０人以下であって、労働者がいないところ、つまり自分自身が働いている1人だけの企業が非常に多い。それから、家内労働、低年齢の労働者が多い。その結果として給与水準も低い。法的制度の外側での経済活動が多い。これは具体的にいいますと、税金を払っていないということ、それから企業活動を行うに当たっての一連の登録、あるいは登記といった法的な手続が行われていない。それから、食料品なんかを扱うときに、法律あるいは条例で定められた一連の基準を守っていない。そういったことがこの中に入ってきます。最後として、競争的市場への参入が見られるとありますが、これは特にリマの場合、寡占的な市場体制というのが一般的なわけです。一部の大きな企業が市場を握るという形が一般的で、インフォーマル・セクターは先ほども申しましたように、いわばそうした企業の残余のところで参入してきておりますから、その寡占的な市場の外側で広がる、いわばかなり自由競争市場の中に入り込んできている。ただ、この点については、リマの場合、ペルーの場合、疑問を呈する研究者が少なくありません。

そこで、この考え方を一応もとにいたしますが、殊にリマを考えるに当たって、ＩＬＯの考え方に基づいた今の開発と参加のための研究センターの定義で十分なのだろうかという疑問がどうも出てきます。その疑問ですが、図4に「雇用状況と就労部門」と書いたものがございます。１９８９年の段階で上の位置にある比較的カーブの緩い線が、近代部門に属している労働者の数です。これは、全体の経済活動人口の何パーセントがその部門に属しているかというものをあらわしたものです。したがって縦の軸はパーセンテージであります。８９年の段階で下の位置にあるカーブが比較的大きなものが、完全就労の割合をあらわしたものです。

上の企業形態による近代部門の就労者の線というのが、開発と参加のための研究センターの定義に基づいて調査された数値です。つまり近代部門は６０％前後のところでずっと推移していますが、近代部門に６０％前後の人間がいるということは、インフォーマル・セクターの部門にその残余である４０％前後の人間が働いているということです。

ところが、これは経験的にですが、８８年、９０年、ガルシア政権末期に入って経済危機が深刻化してくる中で、それ以前にはとても見られなかったインフォーマル・セクターの活動、これは特にアンブランテと呼ばれている路上での物売りですが、これが急増いたします。それから白タクも急増いたします。ところが、先ほどのＩＬＯの基準をもとにつくった近代部門の考え方で

は、実は今お話ししたような短期的な変化というのは追い切れないのです。その意味でリマのインフォーマル・セクターを見ていく上では必ずしも有効な定義ではないということができます。

そこで考えられますのが、低成長期の中で、これは1日のある時間だけをインフォーマル・セクターにかかわっているようなフォーマル・セクターの労働者、つまり、例えば割と大きな企業に働いていながら、その通勤の時間を利用して白タクをするとか、あるいは女性の場合ですが、学校の教師を勤めながら、学校は基本的に午前中で終わるのですが、午後はアンブランテという露店の仕事を手伝う、そういった形での労働というのが押さえ切れていないわけです。実際にふえてきているのは、特に低成長期にふえるのはそういう形での労働であります。それで、仮にそのインフォーマル・セクターとのかかわりを潜在的なインフォーマル・セクター就労者と呼ぶとするならば、そこの部分が実は抜け落ちてきている。リマ、ペルーの場合には、ここの部分というのを見逃すと、特に実際に目にする、あるいは耳にするインフォーマル・セクターのあり方とは随分乖離したものになってしまうおそれがあります。

そこで、短期的な変化に最も敏感に反応する一つの指標として、就労の形態としての完全就労の変化を指標として見ることができないか。また図4のグラフですが、例えば89年の段階で20数パーセントが完全就労です。これが意味するところは、失業及び不完全就労というのが80%ぐらい、失業者は大体平均して10%前後です。

これは図3の「リマにおける雇用状況の変化」というグラフを見ていただきたいのですが、真ん中の真っ黒に塗りつぶしてある部分が不完全就労の部分です。それで、なおかつ失業といいましても、先ほど申し上げたような事情がありまして、完全な失業の状態というのはむしろ考えにくい。その意味で、半ば便宜的にですが、完全就労以外の部分を不完全就労、あるいはインフォーマル・セクターに従事している人間と考えることはできないか。というのは、先ほど申しましたように、その指標というのが、実はその景気の変化、経済の変化に最も敏感に反応する部分であるということができるわけであります。

ところが、ここにもまた一つ問題があります。というのは、特に製造業部門でのインフォーマル・セクターですが、例えば段ボールをつくったりするような家族経営のインフォーマル・セクターもございますが、そういったところというのは、実は好景気のときにはむしろフォーマル・セクターの給与水準よりも高いということが知られています。それを考えますと、実はこれだけでも必ずしも完全な指標とは言えないところがあるのです。

そこで、とりあえずここでリマを見ていく中で、かなり実態に近いところを示しているのではないかと思われる指標は、もう一度「雇用状況と就労部門」のグラフで、例えば78年の段階で完全雇用が近代部門の労働人口より下回ってきています。この下回った部分というのは、フォーマル・セクターに働きながらも1日のどこかの時点でインフォーマル・セクターとかかわってきている人口が多くなってきていることを意味します。つまり近代部門よりも完全就労が下回ったここの部分が潜在的なインフォーマル・セクター就労の部分に当たってきます。

他方、例えば80年を見ていただきたいのですが、完全就労の割合の方が近代部門労働者の割合よりも高くなってきています。これが、先ほどお話しした一部のインフォーマル・セクター労働者の給与水準がフォーマル・セクターの労働者の給与水準よりも高くなっている時点を示しています。つまりここの上に上った部分のかなりの部分というのは、実はインフォーマル・セクターの部分なのです。つまり2本の線の常に下にある部分をたどっていくと、およそリマに行って視

覚的に見られるインフォーマル・セクターの実態を反映したような形になるのではないかと思われます。

そういう形でつくったインフォーマル・セクター、それから潜在的就労者を含めたインフォーマル・セクター人口というのが、図5のグラフに示したものであります。1枚目のグラフのところで比較的経済成長が低かった78年あるいは85年、それから87年以降ですが、こちらのところではインフォーマル・セクターの数が急にふえるわけです。ところが経済成長が比較的あった79年から82年ぐらいにかけて、短期的な経済成長によってもインフォーマル・セクターの数というのは必ずしも減少しない。短期的な経済成長によっては、労働者当たりの資本の改善が見込めないということの反映にほかなりません。ここまでが若干技術的なといいますか、お話をするに当たっての前提です。

次に2として提示いたしました「雇用から見たインフォーマル・セクターの変遷」というところです。

1982年の開発と参加のための研究センターの調査で就労者の人口比で見たインフォーマル・セクターの産業別構成というのは、およそ次のとおりになっています。商業52%、製造業26%、交通12%、この交通の中には白タクは入っていません。サービス10%、このサービスの中には、家事労働（お手伝いさん)、これが随分のパーセンテージを占めています。82年の段階でこういう数字を示しているのですが、これがどんどん変化していきます。

その変化の様子を産業別に見ていきますと、まず商業のところですが、これは図6のグラフを見ていただきたいのですが、これは何を示しているかといいますと、リマのマーケットの数がどのくらいふえていったかというものを示しています。上の棒グラフが累積です。下の折れ線グラフが対前年度の増加数です。これだと余り判然としないので、次のグラフ（図7）を見ていただきたいのですけれども、これは増加数だけを拾い出して拡大したものですが、70年に一度大きなピークがあります。それから、78年から80年ぐらいにかけて、もう一つのピークがあります。それで、ここのピークですが、IS人口のグラフ（図5）を見ていただきたいのですが、77年から79年にかけてIS人口に幾分かの山があります。この山とほぼ重なる時期に、こちらのマーケット・プレイスがやはり増加してきているのです。

つまりこの時期のインフォーマル・セクターの増加というのは、商業部門でのインフォーマル・セクターの増加を意味していたと考えることができます。これは、とりもなおさず60年代からの人口増加の中で、フォーマル部門の中での商業が都市の需要を必ずしも満たしてくれていなかった。その中で、満たされていなかった需要を見越して、労働力の残余であるインフォーマル・セクターがそちらの部門に参入してくるという経緯があります。

ところが、80年代に入りましてマーケット・プレイスの数自体が非常に多くなってきているのですが、だんだん参与の空間が狭くなってきているのです。その意味で商業部門は半ば満杯の状況でありました。ただ、例えば食料加工といっても、例えばセビッチェという典型的な家庭料理、それを路端で売るというようなものは80年代に入っても出てくるのですが、それ以外の一般の最終消費材を売るような露店というのは、80年代頭打ちになってきます。

他方、一番最後のグラフは交通機関の数ですが、79年あたりを一つの変化点としまして、79年から84年にかけて急速にその数がふえていきます。ここで言う交通機関と申しますのは、先

ほど言いましたように白タクを含めない主にバスのたぐいです。バスといっても２種類あるのですが、一つは文字通り普通の乗り合いのバス、それともう一つはルート・タクシーみたいなものです。小さなバンを使いまして一定のルートを行ったり来たりするのですが、若干料金が高く、お客がいなければ停留所はどんどん飛び越していく。そういったものが７９年あたりを境にして急にふえます。

８４年の段階でリマの都市交通、公共交通機関の約９１％がインフォーマル・セクターに属しておりました。つまりわずか１０％が市営のエナトル・リマという公営のバス交通機関だったのです。ここの時点においても、公式に、つまり法律の上で公共交通機関として認められていましたのはエナトル・リマだけなのです。にもかかわらず車両数で見て９１％はインフォーマル・セクターに属している。

これが意味しておりますのは、一つは商業が初めの段階で伸びてきて、ところが商業が頭打ちになった段階で、その後にできたフォーマル・セクターの空白の部分というのが実は公共交通の部分であったということです。それで、公共交通の部分ですが、なおかつその公共交通の空間を広げるかのように、ガルシア政権に入ってから輸入代替工業化を推し進めるに当たって、車両の輸入制限、輸入の実質的な禁止をいたします。そうすることで公共の交通機関が持っていた車両がどんどん劣化していきます。それで、劣化車両を改造して営業するような、インフォーマルな形での経営というのが拡大していくことになります。

つまり、潜在的就労を含めたI.S人口のグラフで幾つかの盛り上がりがありますが、この短期的な盛り上がりの部分、増加している部分というのは、経営体としてのインフォーマル・セクターがふえたというよりは、インフォーマル・セクターに従事する人口がふえたということそのままだろうと思われます。つまり企業の数としてはふえていない。労働者の数としてふえてきている。特に商業、交通といったものは比較的容易に個人が参与し得る部分なのです。

今お話ししたように商業が伸び、交通が伸びというような状況で、８２年の数字の中で、この時点でも製造業の割合は少ないのですけれども、これから後、９０年代に入ると事情が変わりますが、８０年代を通じて、この製造業の部門の重さというのはどんどん軽くなっていった。少なくとも就労者の割合としては軽くなっていったと考えることができます。ただ、それでもかなり安定した収入源にはなっていたわけです。

２－１の４）の図は、イデスというインフォーマル・セクターを支援しているＮＧＯがあるのですが、そこの調査であります。これは製造業部門で一体どの程度リマのインフォーマル・セクターが近代部門と関係を持っていたかというものを示した図であります。上の部分に７０％、３０％と書いてありますが、これはインフォーマル・セクターから製品が出てきた部分です。インフォーマル・セクターから出てきた製品の７０％は都市近代部門の中に吸収されていきます。下の部分に数字が４つ並んでいるのは、これはインフォーマル・セクターへの中間材の流入を示した部分です。都市フォーマル・セクターからの流入が５２％あります。

これをどう読むかですが、７０％が流出して、５２％が流入しているわけですから、これを足した１２２％のうち１００％分を切り捨てまして２２％、少なくとも都市インフォーマル・セクターの２２％、製造業部門の２２％は恒常的に物の流入・流出の両側にわたってフォーマル・セクターと関係を持っているということは言えるだろうと思います。

実際には、これは印象以外の何ものでもないのですが、実際には２２％どころか半分ぐらいは、

８９年の時点で多分インフォーマル・セクターとフォーマル・セクターの結びつきというのはあったのだろうと思うのですが、それが意味するところは、インフォーマル・セクターが既に、フォーマル・セクターのある一部分、あるサイクルの中にすっかり組み込まれ始めてきているということです。

つまり、多くの人間がアンデスの山からリマの中に入り込んでくる中で、在来の都市フォーマル・セクター、近代部門の中に吸収されなかった労働力の一時的な避難所として生まれてきたインフォーマル・セクターとは８９年の時点では様子が随分違ってきているのです。吸収されない残余として生まれて、もしフォーマル・セクターの方に吸収されるならば、そちらの方に移っていきますよという状況とは随分違ってきているわけです。既に吸収されないことによって生まれてきたインフォーマル・セクターが一つの部門として固定化し始めてきています。

ここまで見てきたのは主に個人、労働者、就労人口という形で議論を進めてきましたが、次の２－２のところで見ておきたいのは、経営体の集合としてのインフォーマル・セクターの部分であります。

１）の資料は、経営体の数から見たインフォーマル・セクターの産業別の構成であります。ただ、ここの経営体は従業員を伴う経営体ですが、これで見ますと製造業が３２.１％と最も高いのです。なおかつ従業員数で見ますと、４６.８％、半分近くがこの３２.１％の製造業部門の経営体の中で労働していることになっています。

つまり製造業部門のところでは、もう既に小企業、あるいは中小企業と言っていい形をインフォーマル・セクターがとり始めているのです。インフォーマルと言いますが、確かに税金は払っていないあるいは登記等々を怠っているという側面は確かにあるだろうと思われます。ただ、実態としてこの時点で既に中小企業と言っていい側面を持ち始めてきているわけです。先ほども言いましたように、フォーマル・セクターとの関係も恒常化し、形態的にも中小企業に接近し、所得においても場合によってはフォーマル・セクターの給与以上のものを獲得することができている。

実はこの動きは、つまり１人企業ではなくて従業員を伴う企業がふえてくるというのは、何も実は製造業だけのものではなくて、８０年代に入ってからの一つの一般的な傾向として見られます。それが２）の数字ですが、８２年と８４年の比較です。これは全業種についての比較ですが、全体の８４％が従業員を実は伴っていないという企業だった。ところが８４年には、その数が５６％にまで減ってきています。つまり、まさに中小企業と呼んでもいいような形が、この時期から生まれ始めてきているということができます。

３－１ではインフォーマル・セクターを中身としては少なくとも二つの部分に分けて考えた方がより実態を理解できるのではないかという考え方です。幾つかの時代区分をとりました。

まず（１）で、１９５０年代までの工業化以前、つまり人口の増加が始まる以前のところで見ますと、確かにリマには歴史的に所得の高い層、貴族階層、あるいは寡占的な大企業家といったものが集中しておりましたので、家内労働に従事するような、あるいは彼らにサービスを提供するようなインフォーマル・セクターというのはかなり前から、独立からと言ってもいいのですが、ずっと存在しておりました。

ただ、それは極めて少ない数でありまして、それが実際にふえ始めますのは、（２）の工業化なき都市化という１９６０年代から７０年代にかけての時期であります。いわばこの時期がリマに

おけるインフォーマル・セクターの揺籃期であります。この時期に誕生してきたインフォーマル・セクターを仮に古典的なインフォーマル・セクターと呼ぶとしますと、これは通常インフォーマル・セクターの形成の中で語られてきているような、農村から都市に移ったにもかかわらず都市のフォーマル・セクターの中には吸収されないような労働力の余剰が自己雇用空間としてのインフォーマル・セクターが形成されてきた時期であります。

ところが、(3)の80年代に入りまして、インフォーマル・セクターといっても、どうもその中身は幾つかに分けて考えた方がわかりやすくなってきました。一つは、企業家的なインフォーマル・セクターとでも呼べるようなものが出始めてきた。これは、製造業を核としながら形成されてきているものです。つまり、60年代、70年代までの言ってみれば農村から入ってきた人口がフォーマル・セクターに移るまでの中間的なよりどころといいますか、避難所的性格が強かったのに対して、この企業家的なインフォーマル・セクターというのは、インフォーマル・セクターに踏みとどまるというものです。

他方、農村からの人口がどんどん流入してまいりますので、相変わらず古典的なインフォーマル・セクター、これを仮に避難所的なインフォーマル・セクターとでも名づけるとするならば、その避難所的なインフォーマル・セクターというのは相変わらず残っております。これは個々人が簡単に参入できるような部門、アンブランテといった商業、それから交通機関、特に白タクなんかがそうですが、そういったところを中心として形成されているものであります。

実はこの80年代に、ペルーのエルナン・デ・ソートという経済社会学者が、「エル・オトロ・センデロ」(もう一つの道)というインフォーマル・セクターについての本を書きまして、これは何ヵ国語にも訳されて、随分ペルーのインフォーマル・セクターというものが世界的に有名になった時期ですが、彼が強調していたインフォーマル・セクターの中に見られる活力を代弁していたのは、まさに80年代に生まれてきた企業家的なインフォーマル・セクターであっただろうと思われます。

これを示している一つの出来事ですが、雇用状況と就労部門のグラフを見ると、1980年というのが完全就労の割合が近代部門の労働者の割合を上回ってきています。つまり製造業部門あるいは企業家的なインフォーマル・セクターの活力が非常に強かった時期であります。くしくもこの年、リマでは市長選挙が行われています。

リマの市長選挙というのはリマ市の市長だけではなくて、リマ市の中にある区の区長選挙も行うのですが、実はこの80年の区長選挙の中で、初めてインフォーマル・セクターの代表とも言える中小企業体の集まり、ある協会があるのですが、その協会のリーダーの何人かが区長として当選してきています。つまり活力があったこの時期に、単に経済的な力だけではなくて、既に政治的にも、いわば利益集団としてのインフォーマル・セクター、あるいはインフォーマル・セクターを代弁するような利益集団といったものが形成され始めてきたわけです。

実はこの動きは、その後の経済危機の中で経済力が衰えても続いておりまして、フジモリ政権下に入って、例えば一番初めのサンドロマンという副大統領も中小企業連合会の会長でありました。そういった形で、この時期からこの企業家的なインフォーマル・セクターがインフォーマル・セクターの政治的、経済的の両面にわたるリーダーとして、古典的なインフォーマル・セクターから分離したということができるだろうと思われます。

ここまでの時点では、実は労働者の動きという点から見ますと、農村からインフォーマル・セ

クターに流れ込む動きは当然あります。それから、インフォーマル・セクターからフォーマル・セクターに流れる動きも当然ありますが、これは以前よりも細くなる。その一方で、フォーマル・セクターからインフォーマル・セクターに流れ込んでくる動きというものが生まれてきます。これは、先ほどお話ししたように潜在的なインフォーマル・セクター就労者の中に、フォーマル・セクターの労働者でありながら1日のある時間をインフォーマル・セクターの労働に従事するというような形です。

これが変則的な形ながら構造調整が始まりました89年、このあたりから人の動きに大きな変化が生じます。フォーマル・セクターからインフォーマル・セクターへの人の動きというものがかなり太くなってくる。といいますのは、完全就労者の数が減ってきますので、近代部門の労働者でありながらインフォーマル・セクターに従事するのみならず、特に90年以降ですが公務員の人員整理が行われて、そこからはじき出された労働力がインフォーマル・セクターの中に入り込んでくるというような現象が見られます。

ただ、この時期に広がってくるインフォーマル・セクターは、先ほどお話しした企業家的インフォーマル・セクターというよりは避難所的な部門であるだろうと考えることができます。おおよそこんな格好でインフォーマル・セクターの分化が行われてきます。

ところが、このインフォーマル・セクターですが、何かを生産する、あるいは企業あるいは経営体と言ってきているのですが、実は、消費、あるいは日常生活、家族、家庭、そういったものとかなり深い結びつきを持ってきています。その話が3－2の部分です。

生き残り戦略という言葉ですが、とりあえずここでは都市貧困層が、その不足を補うために自分たちがした工夫のこととでも考えておいていただければいいと思います。別の言い方をするならば、都市貧困層が貧困という環境に適応するための適応戦略です。

この中にどんなものがあるかといいますと、ここの例で挙げているのはコメドール・ポプラルという民衆食堂、あるいは大衆食堂と訳されるものです。簡単に申しますと、都市貧困層の主婦層が集まりまして集団で調理をして、みんなで食べる。ただ、それは幾つかの形態があるのですが、社会なべといってもよろしいでしょう。

このコメドール・ポプラルというのが急速にふえ始めるのが84年以降であります。これが何を意味しているのかといいますと、先ほどの雇用状況と就労部門のグラフの中で、84年から後、ほぼ一貫しまして完全就労の割合が近代部門の割合を下回ってきています。つまりインフォーマル・セクターの活動そのものが下火になってきています。特に企業家的なインフォーマル・セクターの活動が下火になってきています。

他方、この時期、先ほどお話ししましたように商業部門が既に77年から79年くらいのところでかなりの程度満杯になってきて、84年の時点では交通の部門も90%を超え、インフォーマル・セクターに関してはかなり満杯になってきている。ついては、その後に続くインフォーマル・セクターの新しい参入空間というのが、この時期当面なかったのです。それゆえに、インフォーマル・セクター従事者、あるいはインフォーマル・セクターに従事する家計というのは、インフォーマル・セクターという形で外に新しい所得源を求めるのではなくて、コメドール・ポプラルのような生き残り戦略として、いわば消費の水準を高めながら支出を押さえる方向に戦略がシフトしていくということができるだろうと思います。

特にこれが顕著になりますのが、90年8月の例のフジ・ショック以降です。86年の数字で、

リマ首都圏に５９１のコメドール・ポプラルがあったと書いてありますが、この水準が実は８９年ぐらいまでほぼ６００前後ぐらいであっただろうと思われるのです。ところがフジ・ショックが終わって２ヵ月目に私が調査に入ったときに、デスコという向こうの民間の研究機関の一つですが、そこの調査で１,３００ぐらいのコメドール・ポプラルがあったというのです。つまり、わずか数ヵ月の間に一気に倍以上になった。既に所得の拡大を外に求めることができなくなって内側に向いてきたという時期だったのです。

ところが、実はその時期にペルーでは新聞の中で盛んに使われたのがクラッセ・ポプラル、とりあえず私は庶民階層と呼んでいるのですが、この言葉が頻繁に新聞に出てきた。それから、コメドール・ポプラル、セクトーレス・インフォルマーレス（インフォーマル・セクター）、これも頻繁に新聞を騒がせました。この９０年の深刻化した事態の中では、インフォーマル・セクターの中で既に所得の拡大が難しくなっていた庶民階層が、自分たちの消費を何とかしようという戦略に変えて、それの活動が爆発的に広がった。それが注目を浴びたということが挙げられます。ところが、去年のエルコメルシオ紙にはクラッセ・ポプラルなんていう言い方はほとんどないのです。インフォーマル・セクターという言い方もほとんど顔を出してきていない。状況が随分変わってきているのは間違いないのです。つまりここで一つ言えますのは、インフォーマル・セクターを考えるに当たって、この都市貧困層が行った生き残り戦略をやはり考慮しておく必要があるだろうということです。というのは、消費にかかわる部分と生産にかかわる部分の間には、かなりの連続性がある。特にコメドール・ポプラルというような集団共同調理というのは、容易にインフォーマル・セクターの部分に転じかねないということです。実際にインフォーマルな食堂というのがこの時期ふえていったわけです。

覚えていらっしゃる方が多いだろうと思うのですが、９１年の１月にコレラの大流行が起きます。９０年の８月から、このコメドール・ポプラルがふえ始めます。このコメドール・ポプラルを基盤として、一部は外に向かって、露店で簡単な調理した食品を売ったりするような商売が広がっていきます。その中では、セビッチェというような生魚のマリネみたいなものでありますが、そういったものを扱う商売もふえていった。この因果関係を直接結びつけていいのかどうか、まだ何とも言えないところではありますが、コレラの流行と生き残り戦略の拡大、それから、それと並行する形でのインフォーマル・セクターでの調理食料の販売、こういったものがどうも何か因果関係があるような気がするのです。

４に行きますが、先ほど少しお話ししましたが、インフォーマル・セクターというような部分、あるいは庶民階層といったような部分への関心は今やかなり薄くなってきています。なおかつ庶民階層と呼ばれるような彼ら自身も、自分たちのことをそう呼ばなくなってきているようです。その変わってくる意識変化の動きの例としまして、二つ挙げておこうと思います。

一つは、これも最近ペルーの関係ではかなり有名になってきましたガマーラという繊維を扱う業者の一つの組合であります。リマの中心に近いラ・ビクトリアという地区の中のガマーラという小路を中心に繊維を扱う商業組合が生まれました。正式にいつ生まれたのかというのははっきりしないのですけれども、ペルー・ガマーラ繊維商組合といったものが生まれています。そこを中心に１万近い小企業、インフォーマルと呼ばずにミクロ・エンプレッサと呼ぶのですが、その協会あるいは組合の中核ですが、それと、その周りにその協会に直接参加はしていない５,０００近い露店商（アンブランテ）が狭いところに並んでおります。

実はここの1万近い企業と5,000近いアンプランテの中で、特にこの数字は1万近いその中核となっている企業の年間の収益が8億ドルだそうです。これを単純に割りますと1企業当たり8万ドルの年収ということになります。インフォーマル・セクターの年収です。これだけ高い収益を得るに当たっては、いろいろなことが行われているのですが、実はこれを組織するに当たっては、中核となった二つぐらいの家族があります。家族を中核として、先ほどお話ししたガマーラ繊維商協会、あるいは繊維商組合といったものが組織され、そこが幾つかのプロジェクトを組むようになります。

それで去年の5月の段階で考えられていたプロジェクトというのは、一つは自分たちのために商品倉庫を確保して、しかも、その商品倉庫については、その中核となっている企業だけではなくて、その周辺の5,000近いアンプランテにも使用してもらうというものです。ただ、彼らにそれを使用させるに当たっては、それを使用する以上は税金－これは彼らに納めるお金という意味ではなくて国への税金の支払いです。それを払ってもらうようにしたいということです。言ってみれば、これはインフォーマル・セクターの中から生まれてきた自発的なフォーマル化の動きの一つであります。

さらに、将来的にはガマーラ投資銀行といったものをつくりたい。これは当然商業活動への投資も行うのですが、それのみならず、クルトゥーラエンプレスアル、企業分化をつくっていくための投資も行いたい。

そのほかに、リマの南の方にビジャエルサルバドールというところがあります。いろいろな援助が集まっている、援助の見本市、あるいは博覧会と呼ばれているようなところですが、そこにコーノ・スル工業団地特別プロジェクトという地元のプロジェクトがあります。そこのプロジェクトとの協定を結びまして、そこの工業団地でつくられた繊維製品、あるいは金属の小さな加工品ですが、そういったものの販売にガマーラ繊維商協会に属しているメンバーが当たる。その販売のために、ガマーラの狭い土地だけではなくて、リマのセントラル、中央、中心街、旧市街の商業センターの中に一画を占めまして、それの販売を始めているようであります。さらには、将来的には、自分たちの商業センタービルみたいなものをつくりたいという計画もあるようです。

今、彼らが抱えている問題というのが三つほどありまして、一つは、先ほど年間8億ドルの収益があるというお話をしましたが、そういった事情もありまして地価が高騰している。94年の段階で1平方メートル当たり3,000ドルだったものが、95年の段階で4,000ドルから4,500ドルと1.5倍近く上がっている。要するに同じ地区で新しい場所を確保するのが難しくなってきているということです。

それともう一つは、その周りに集まっている露店商ですが、その露店商が路上を占拠しまして交通の邪魔をしている。

最後は商業の活動の範囲を広げたい、その拡大のターゲットとして、アジアでありますとか、要するに外国への繊維製品の輸出を考えている。といったことが今の彼らの課題になっているようであります。

他方、もう一つの例は、リマにはもともと大きな中央市場があったのですが、その中央市場の近くにエルウエコ、穴という意味ですが、エルウエコという新しい見本市場、フェリアックオーが去年の6月15日に開設されました。

この見本市会場ですが、これはメンバーシップを募りまして、そのメンバーシップを持つ人間が約3,000人ぐらいで、実際にそこで開業することになったのは1,500人。というのは、これは1,500戸しか店舗をつくることができなかったということです。これは何かといいますと、実は私も知らなかったのですが、この前たまたまシンポジウムで話を聞いていて、リマが世界の文化遺産とか何とかという都市に指定されたのだそうです。それに伴って街の景観を整備しなければいけないという話です。その事業の一環として、リマの旧市街の中に散らばっている露店商を1ヵ所に集める。その露店商の整理を行うに当たって、どこか場所を提供するという話であります。

この場所ですが、そもそもは1988年にもう既にリマ市が購入していた土地でありました。ところが、エルウエコという名前のとおり、何か大きな穴があいていたようで、どうも利用しにくい土地であった。そこに、国の資金等々を入れて整地をして、それで新しい見本市会場をつくった。

それで、ここの一つの新しさは、同じ場所の中に自分たちの仲間だけ、自分たちといいますかアンブランテだけを置くのではなくて、比較的大きな企業にも誘いをかけまして、30日という極めて短期間ですが、開設から30日の間だけは見本市の会場を展示するために無償でお貸ししますと。つまりアンブランテとフォーマル・セクターとそれを一つの空間の中で近接させるのです。

なおかつ、市のプロジェクトとして行った。ここに店を出すに当たっては店舗代として500ドルを支払う。ただし1店舗をつくるに当たっては600ドルの費用がかかっているので、100ドル分だけ国からの補助が出ております。ただ、商売をする以上は税金を払ってくれと。これは、言ってみれば市からのソフトな形でのフォーマル化の働きかけです。といったことがここ1年ぐらいの大きな出来事であります。

さて、そこで5ですが、インフォーマル・セクターの対策としてまず考えられるのは、少なくとも二通りあるだろう。一つは、5－1で挙げてありますように、インフォーマル・セクターに属する労働者に対する支援、これは特に避難所的なインフォーマル・セクターに、特に構造調整以降の段階でフォーマル・セクターから流入してきた人々に対する支援が一つ考えられる。もう一つ考えられるのは、インフォーマル・セクターの経営体そのものに対する支援、これは言ってみればインフォーマル・セクターをフォーマル化させていくための支援があるだろうと思われます。

まず労働者に対する支援ですが、これは、最終的にはフォーマル・セクターからインフォーマル・セクターに流れてきた人々、あるいはインフォーマル・セクターにもともといた人を既存のフォーマル・セクターの中に雇用吸収させていくということです。雇用の創出ができないのが、今のペルー経済の一つの悩みであることは間違いありません。

ただ、その一方で、新聞紙上には、この求人情報がかなり出てきているのです。もちろん雇用が創出できないながらも求人というのは常にあるわけであります。これが意味するところは、求める職と、労働力と労働者の質と、それから求められる職種との間のミスマッチが起きてきているということです。ついては、そこのミスマッチを是正するために一定の職業訓練を施すという方策が一つ考えられるだろうと思われます。

特に職業訓練を施すに当たっては、単に職業訓練を施すだけではなくて、何らかの形の資格認定の制度を導入する。一つの人的資本の形成という意味合いにおいて、しかも、それが公的に何

らかの形で保障される、証明されるといった制度の導入が一つ考えられるだろうと思われます。

もう一つは、公的機関による職業の斡旋です。ペルー社会に限らず、ラテン・アメリカ社会は、どうしても口こみによって職業を探すのが一般的であります。特にインフォーマル・セクターに属する人々の中では、一般的に行われるのがその形態です。ところが、新聞そのものが高いですから、比較的安価で情報が提供されるような公的機関を設定してやるということが、ミスマッチの解消の一つの方法として考えられるだろうと思われます。一方、インフォーマル・セクターのフォーマル化ですが、一つは、フォーマルそのものの中身を拡大してやればいい。いろいろな規制を緩和してやればインフォーマル・セクターがフォーマルに近づくだろう。もう一つは、資金援助等々を通じての生産性の向上であります。

強調しておきたいのは、選択的なフォーマル化、特にインフラ整備、社会インフラの整備としてインフォーマル・セクターを活用することが考えられるだろうということです。これは、とりもなおさず公共交通機関の話ですが、９４年の世銀の開発報告のインフラ特集の中で市場原理によるインフラの供給という話が随分強調されていましたが、リマ社会においては、実はもう既に、形はインフォーマルでありますが市場原理を通じてインフラ整備あるいはインフラの提供というのは実際に行われてきている。少なくとも公共交通機関についてはもう行われてきているわけです。それを何らかの形でフォーマル化してやるという方法が考えられるだろうと思われます。

さらに、これはインフォーマル・セクターそのものに関する問題というよりは、むしろその周辺の問題であります。仮にフォーマル化を考えるに当たって、さまざまな規制を緩和したとするならば、コレラの事例でおわかりのとおり、うっかりすると劣化した食品あるいは非常に質の悪いものが出回りかねない。その意味で、いわば規制に代わるものとして、市場になれていくという意味合いで消費者教育に重点を置く必要があるのではないか。これは貧困対策とのかかわりもあるだろうと思われますが、そういった点が恐らく考えられる点だろうと思われます。

○質問　インフォーマル・セクターの定義ですけれども、最初のＩＬＯの考え方を基礎にした定義というのは非常にたくさん判断基準がありますので単純に「法的な枠組み以外での経済活動」という形で理解した方が、その後の説明も非常に理解しやすかったのですが、例えばいろいろな統計データ等でつくられているインフォーマル・セクターというのは、どういった条件で整理されたものなのでしょうか。

○富田　実はそこは極めてばらつきがあるところですけれども、基本的には、ここに挙げられた条件を満たしているというのが基本的な考え方であります。ただ、そのばらつきの幾つかの理由というのは、統計そのものの問題もありますし、その基準をどこにとるのかというのは、調査者にかなり依存しているところがあります。

○質問　例えば従業員数とか生産性が極めて低いというのは、定義というよりもインフォーマル・セクターの特徴というふうに理解しやすいのですけれども。

○富田　全く私もそのとおりだと思いますし、定義としては非常に使いにくいものであるだろうとは思います。

ただ、要するに生産性が低いというようなところは、国あるいは地域によって、どこに基準をとるかというのはばらつきが出てくるのも確かだろうと思います。

○質問　農村からフォーマル・セクターに流れていくときには、地縁とか血縁を頼りに行くのですか。

○富田　まさにそのとおりです。幾つかのパターンがあるのですが、リマに直接来る場合、それからリマに直接ではなくて、海岸のほかの都市に一たん移住してからリマに来る場合の二通りぐらいあるのですけれども、いずれの場合も１回目の移住については、多くの場合は地縁をたどってきます。ただ、２回目については、むしろもともとの地縁よりは、１回目に住みついたところの周辺での新しい地縁関係であるか、あるいは自分の血縁関係、親族関係であるとか、そういったものがむしろ多く働いてきているようであります。

地縁の関係で入っていきますので、極めて似通った習俗、習慣を持って入ってくるわけです。リマに入り込んでくる時点では、恐らく都市で労働をするわけですから、その習慣というのはとりあえず捨てるつもりで来たのだろうと思うのです。ところが、ある経済的な困難にぶつかったときに、もともと自分たちが持っていた共同作業の習慣みたいなものを半ば模倣する形で、新しくできた自分たちの近隣の組織を活用して共同作業を行っていくという形が多いようです。これについては、コメドール・ポプラルについては今お話しした形からははずれるかもしれませんが、最も多いのは、実は共同の住宅の建設というのが、まさにその形に入ってきます。コメドール・ポプラルの場合には、もともとある共同意識みたいなものに上乗せされて、教会組織みたいなものが随分作用してきているのですけれども、いずれにしても地縁関係と親族関係が、ガマーラもそうですが、組織化の基盤になっていることは間違いないだろうと思います。

その意味で、実は先ほどお話しした競争的市場への参入というのは考えにくいのではないかということなのです。血縁関係をたどってくる、それから地縁の関係をたどってくる、なおかつそれがインフォーマル・セクターへの参入のときに働くのだとしたら、その中で起きてくるのは実は競争ではなくて、もともとある社会関係のネットワークを使って入ってきているので競争とは呼べないのではないかという議論が一方ではあるわけです。

○質問　ペルーだけでなくてラテン・アメリカ全体で、軍政から民政への移行と構造調整政策の中で、貧困層、もしくは大衆の経済を活性化させるのはどうかというような点で、選挙との関連の中でこうやってインフォーマル・セクターがかなり重視されてきた。恐らくペルーだけでなくてラテン・アメリカ全体、もしくはほかの途上国においても、かなり当てはまることではないかなという気はしているのです。そういった中で、職業訓練の部分が、特にＪＩＣＡが協力しやすい分野かなというふうな気がしているのです。具体的に職のミスマッチというのは大体どういう分野で起きているのか、もし御存じだったらお聞かせ願いたいと思います。

○富田　正確とは言いかねるのですが、例えばエルコメルシオの求人広告でかなり多いのが会計士です。会計士を求むというのは結構あるのです。それから、これは８８年から９０年には余り見かけなかったもので、やはりコンピューター関係のものが増え始めているような印象を受けています。

実はその意味で、会計士求むというのが多かったものですから、資格認定の制度みたいなものを公的に、広範に取り入れる可能性もあるのではないかなという感じを持っております。

○質問　専門学校みたいなものは結構リマ市内にはあるのでしょうか。

○富田　あることはありますが、ただ、問題なのは、ある種の階層の分断みたいなものがありまして、低所得者層がアクセスするのがちょっと難しい状況にあるのは確かです。

ただ、専門学校といっても、８８年の段階で調べたもので一番多かったのは、実は理髪関係の専門学校です。これには、田舎から出てきた女性が随分入っていたようであります。ただ、例えば会計士の学校、あるいはコンピューター関係といったものは、少なくとも私の知る範囲ではそれほど多くないだろうと思います。

○質問　そうすると、学校はあるけれど、彼らが入っていけない。数が少ないのではなくて、やはり授業料が高い。

○富田　それからもう一つは、その階層的な分類で自主的に排除されているようなところもあります。

○質問　農村からインフォーマル・セクターに入るというだけではなくて、特に不況期なんかの場合に、アフリカなんかでは出稼ぎからまた戻るというわけですね。それで、農村共同体だと、それで扶養されるというような話がよく出てくるのですけれども、ペルーの場合はある程度所得水準が高いので、都市のインフォーマル・セクターでもそういう避難所としての役割を果たせると思います。その場合に農村の役割というのは余り大きくないということになるのですか。

○富田　これは実はインカ時代までさかのぼると言われているのですが、共同体の中からある人間を、共同体の内部に存在しない資源を獲得するためにほかの場所に移住させて、そこで資源を獲得して、その資源を村に持ち帰ってくるという習慣みたいなものがあるのです。それで、それにほぼ匹敵する伝統を受け継ぎながら、その地縁関係を使っての移住というのが行われてきていて、その中で旧村と移住先の間で物のやりとりが行われてはいます。ただ、物のやりとりといっても、例えば地元の名産品でありますとか、そういったものです。７０年代までの調査では、名産品とか珍しいものの類だけではなくて、かなり食料品が行ったり来たりしていたようです。ところが、７５年以降、公共料金が上がってきて、特に８０年代の後半になって交通の費用が上がってくるに従って、村とのやりとりというのは少なくなってきているようであります。

それで、東南アジアについて私の了解する限りだと、人間が出てからの農村での生産性もかなりあるわけです。ところがペルーの場合には、人間が出て農村の生産性が高まったのではなくて逆に落ちてきているのです。人が出たことによってどんどん生産性が落ちているという、通常の経済モデルでは考えられない外側の現象が起きてきている。ついては、田舎に戻れないという状況が出てきているのです。それで、最終的に都市に滞留せざるを得なくなってきている。

確かに都市の所得水準が高いというのも一方ではあるのですが、農村の水準が低くなっているというのもあります。

ですから、仮に国レベルでのインフォーマル・セクターの対策といいますか、インフォーマル・セクターを減らすということを考えるのでしたら、農村の生産性を上げてやるというのは極めて有効な方法だろうと思います。ただ、実際には今農村は随分荒れていまして、人がいなくなって荒れ始めたのが一つ。それと、例の８０年代の後半あたりから断続的にある日照りの問題が一つ。それから、道路網の整備に伴って伝統的な潅漑の堰がどんどん分断されている。そういった事情もあって、農村がかなり荒廃していて、すぐにはちょっと手がつけられない状態だろうと思います。

○質問　会計士とかコンピューター関係の求人ですけれども、それはインフォーマル・セクターの人が企業を興したり、大きくしたりするときに、マネージメントとか会計処理をやれる人が必要だという需要があらわれているのですか。

○富田　そうではないです。それはフォーマル・セクターからの需要です。例えば外国企業が来たときにも、そういう人が必要になるということです。

つまり、もともとフォーマル・セクターで働いていた人間が構造調整の中でフォーマル・セクターからはじき出されて、いわば避難所的なインフォーマル・セクターの中に滞留せざるを得ない状況というのは今でもあるわけです。

○質問　先ほどのガマーラの例のような形ですと、要するにインフォーマル・セクターから自発的にフォーマル化したいという流れだと思うのですけれども、一方、中央市場の例では、政府が若干介入してフォーマル化していくという流れがあると思います。例えば交通関係でインフォーマル・セクターが９０％という状況でフォーマル化するということは、やはり政府が介入するという部分が当然あると思うのですが。

○富田　直接介入してのフォーマル化というのは、それほど顕著ではありません。法律や基金はあります。ただ、それの援助が直接フォーマル化、つまり税金を払わせるため、あるいは登記を行うようにするためという形では、まだ運用されていないように思います。ですから、むしろ中央政府の動きというよりは、リマあるいはビジャエルサルバドールといったような市あるいは区のレベルでの政府の介入では確かに行われています。

一方で、内側からの自発的なフォーマル化の動きですが、これはイデスというインフォーマル・セクター振興協会というＮＧＯがあるのですが、彼らが中心になって８８年ぐらいから始まってはいます。ただ、自発的なフォーマル化といいましても、彼らが考えているのは、我々が税金を払う以上、それ相応の見返りが欲しいということです。そういう形ではフォーマル化への移行の表明、意思表明というのはなされていますし、また、実際にそういう形でのフォーマル化の動きというのは、先ほどのガマーラの例にもあるように出てはきているように思います。

○質問　フォーマルの比較的小さい企業が、税金逃れのためにインフォーマルになるということはないのですか。

○富田　まさにそこが難しいところです。ですから、このインフォーマル・セクターという、この言葉の難しさは、経済活動のインフォーマルさというところまで仮に拡大したとしますと、フォーマル・セクターの大企業の経済活動の一部分が極めてインフォーマルであるということは幾らでもあり得ることです。ただ、それについてはインフォーマル・セクターとはちょっと呼ばないです。

呼ばないというのは、これは先ほどのたくさん並んでいた定義の中でですが、極めて生産性が高かったり、あるいは１人当たりの資本の割合が大きかったりという、そちらの方をむしろ大きく見るわけです。

○質問　リマにおける雇用状況の変化という統計以降ですが、この出所はどういったところからでしょうか。

○富田　これは中銀の資料です。

それから、完全就労のところ、この１本だけについては、先ほどの開発と参加のための研究所、ＣＥＤＥＰの資料です。

それから、その後のものについては、先ほど少しお話ししたエルナン・デ・ソートの、El Otro Sendero からの引用です。

付属資料

1. 問題意識と方法の問題

1-1 基本的認識と問題意識

(基本的認識)

1) 「インフォーマル・セクター」は、その概念およびその実態の両面において複雑化してきており、各ケース・スタディにおいて実態を反映した定義を導入する必要がある。
2) 「インフォーマル・セクター」は、当該社会を構成する他の要素との関係を変化させながら、経済状況に適応している。
3) 「インフォーマル・セクター」は基本的には自己雇用空間であり、その構成要素には経営体と労働者が含まれる。

1-2 (問題意識)

1) リマのインフォーマル・セクターを雇用空間としての構造と社会的機能の二つの面から分析し、支援の方法と対象を特定する。
2) 社会の他の構成要素との関係から想定される支援の方法を特定する。

1-3 インフォーマル・セクターの考え方

1-3-1 一般的な考え方

ILOの考え方を基礎に「開発と参加のための研究センター」が作成した「インフォーマル・セクター」の定義;

労働者あたりの資本が少ない。(労働集約的)
労働生産性が極めて低い。
技術が単純である。
技術的な分業が未分化である。
要求される労働の質が低い。
従業員は10人以下で、従業員がいないところが多い。
家内労働や低年齢労働者が多く、給与水準が低い。
法的制度の外側での経済活動が多い。
競争的市場への参入がみられる。

1-3-2 リマを説明するための考え方

1) 「開発と参加のための研究センター」の定義の問題点;
低成長期に増加する「1日のある時間だけインフォーマル・セクターに関わるフォーラム・

セクター就労者」(「潜在的インフォーマル・セクター就労者」)が考慮されない。

2) 不完全就労者を「インフォーマル・セクター」とみる時の問題点；
製造業部門のインフォーマル・セクターでは、フォーマル・セクター以上の給与が支払われることがある事が知られているが、投資および法的制度の問題から、給与からインフォーマル・セクターを定義するのは難しい。

3) 上記1と2を折衷させた「潜在的インフォーマル・セクター就労を含めたインフォーマル・セクター就労人口」(以下、単に「インフォーマル・セクター人口」)が、リマの状況を説明するのにはより実体的であるといえる。

2 雇用から見たインフォーマル・セクターの変遷

2-1 業種別に見た変化

1) 1982年の調査では、インフォーマル・セクターの産業別構成は次の通り（人口比）。

商業：52%　製造業：26%　交通：12%　サービス：10%

2) 商業

マーケット・プレイスの数で見ると、インフォーマル・セクター人口が増加した1978－79年を最後のピークとして、以後増加率は減少している。

3) 交通

利用される車両数でみると、1978－79年を境に増加が加速し、1984年の調査ではリマ首都圏の公共交通機関の90%以上がインフォーマル・セクターに属していた。

4) 製造業

就労者数で見ると、インフォーマル・セクターに占める製造業の割合は、減少していると考えられるが、成長期の給与上昇にはこの部門の寄与が大きい。

この部門におけるフォーマル・セクターとの関係は次の通り。

近代部門（都市フォーマル・セクター）(70%)　その他 (30%)

（流出）

都市インフォーマル・セクター

（流入）

近代部門（都市フォーマル・セクター）	インフォーマル・セクター	その他国内	海外
(52%)	(20%)	(22%)	(6%)

（インフォーマル・セクターを巡る物の移動：1989年全国）

2-2 形態

＊ここで扱う「インフォーマル・セクター」は、「開発と参加のための研究センター」の定義に基づく分類。

1) 従業員を伴うインフォーマル・セクター経営体の産業別構成

（1982年、経営体数）

製造業：32.1%　建設：15.3%　商業：26.2%　食堂：2.8%

交通：8.3%　サービス：15.4%

従業員の割合で見ると、46.8%が製造業部門に属している。

2) 1982年と1984年の比較で見ると、82年には経営体の84%が従業員を伴っていなかったのに対し、84年にはその割合が56%にまで減少している。

3　社会的機能から見たインフォーマル・セクターの変遷

3-1　インフォーマル・セクターの分化

(1) 工業化以前

1950年代まで　　歴史的社会構造に起因するｲﾝﾌｫｰﾏﾙ・ｾｸﾀｰの存在。

ﾌｫｰﾏﾙ・ｾｸﾀｰへの十分な雇用吸収。

ﾌｫｰﾏﾙ・ｾｸﾀｰ
↑
ｲﾝﾌｫｰﾏﾙ・ｾｸﾀｰ ーーーーーーーーーーー
↑
農村

＊リマが政治的及び経済的特権階級の拠点となっていたことから、家事手伝い等の労働が伝統的に存在していた。

(2)「工業化なき都市化」（トバル、サバタ）

1960年代から1970年代まで　　「古典的ｲﾝﾌｫｰﾏﾙ・ｾｸﾀｰ」の形成。

ﾌｫｰﾏﾙ・ｾｸﾀｰへの不十分な雇用吸収。

農村との関係持続、農村的習慣の維持。

ﾌｫｰﾏﾙ・ｾｸﾀｰ
↑
ｲﾝﾌｫｰﾏﾙ・ｾｸﾀｰ
↑
農村

＊工業生産は1970年代前半（ベラスコ政権（1968-75年）中期）に一時的に好転するものの、その前後（第一次ベラウンデ政権（1963-68年）及びベラスコ政権前期、ベラスコ政権後期及びモラレス・ベルムデス政権（1975-80））には低調。

(3)「失われた10年」

1980年代　　「企業化」的ｲﾝﾌｫｰﾏﾙ・ｾｸﾀｰの分離。

ﾌｫｰﾏﾙ・ｾｸﾀｰとｲﾝﾌｫｰﾏﾙ・ｾｸﾀｰの恒常的関係成立（除雇用）。

ﾘﾏにおけるｻｰﾋﾞｽ業雇用指数の急上昇。

ﾌｫｰﾏﾙ・ｾｸﾀｰ
↓　↑
「企業家」
「避難所」
↑
農村

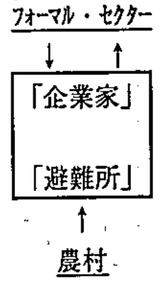
Chavezの研究：「企業家」の存在を指摘。

De Sotoの研究：「企業家」からの視点。

＊地方から都市への移住者及びその子孫から構成されるリマにおける多数派である「庶民階層」において、「コメドル・ポプラル」等の自主的組織的「生き残り戦略」が形成される時期と重なる。

(4) 構造調整以降

1989年以降の構造調整期



ﾌｫｰﾏﾙ・ｾｸﾀｰからｲﾝﾌｫｰﾏﾙ・ｾｸﾀｰへの流れが生ずる。
経済状況の悪化に伴うﾌｫｰﾏﾙ・ｾｸﾀｰの雇用吸収の低下。
構造調整による人員整理（特に公共部門労働者）。
「企業家」的ｲﾝﾌｫｰﾏﾙ・ｾｸﾀｰの所得低下。

＊「企業家」的インフォーマル・セクターの速い回復力と「状況による流入」分の滞留。

3-2 「生き残り戦略」とインフォーマル・セクターの連続性

1984年以降、コメドール・ポプラル（民衆食堂）が急増している。特に、90年にはこの傾向が顕著だった。

1) リマ首都圏におけるコメドール・ポプラルの分布（1986年）
北の三角錐：213　南の三角錐：227　東の三角錐：115　その他：36
合計：591

2) 成立年代構成
84－86：63%　82－83：22%　79－81：15%

4 最近の動向

4-1 「ガマラ」の事例

4-2 「中央市場」事例

5 インフォーマル・セクター支援の視角

5-1 フォーマル・セクターへの雇用吸収（労働者に対する支援）

5-1-1 職業訓練と資格認定制度

5-1-2 公的機関による就職斡旋

5-2 インフォーマル・セクターの「フォーマル化」(経営体に対する支援)

5-2-1 規制緩和による「フォーマル」の拡大

5-2-2 インフォーマル・セクターの生産性向上

5-2-3 選択的フォーマル化

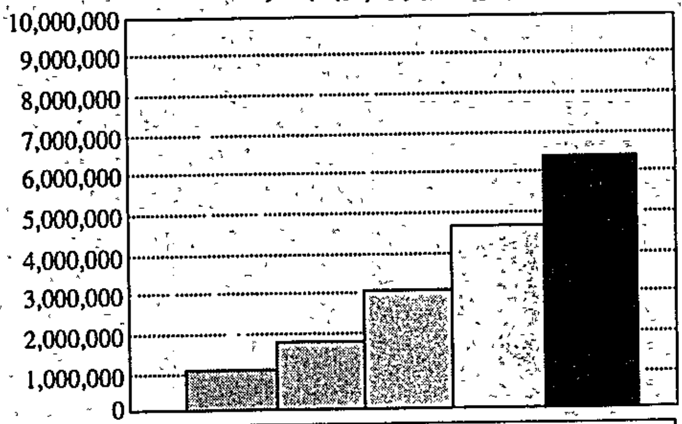
企業家的インフォーマル・セクター
インフラ整備としての「フォーマル化」

5-3 消費者教育の必要性（周辺の意識改革）

5-3-1 「規制」に代わる監視

5-3-2 貧困対策との接点

図1　リマの人口

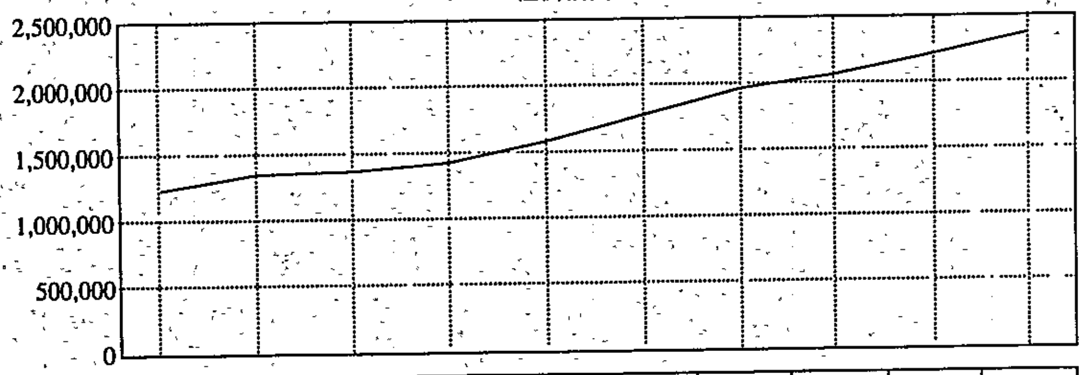


		リマの人口
	1950	1,094,000
	1960	1,808,000
	1970	3,081,000
	1980	4,669,000
	1990	6,405,000

増加率(実数1000人)
1950-1960: 65.3% (714)
1960-1970: 41.3% (1273)
1970-1980: 51.5% (1588)
1980-1990: 27.1% (1736)

(出典：Instituto Cuanto 1991b; p.26)

図2　リマにおける経済活動人口



	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989
経済活動人口	1229000	1344000	1355000	1424000	1581000	1773000	1964000	2056000	2206000	2356000

増加率（実数1000人）　1980-1989: 91.7% (1127)

(出典：Cuanto S.A. 1990; p.205)
＊1985及び1988年は調査が行われておらずデータは不在。
両年については直近の2データの平均値を使った。

図３　リマにおける雇用状況の変化

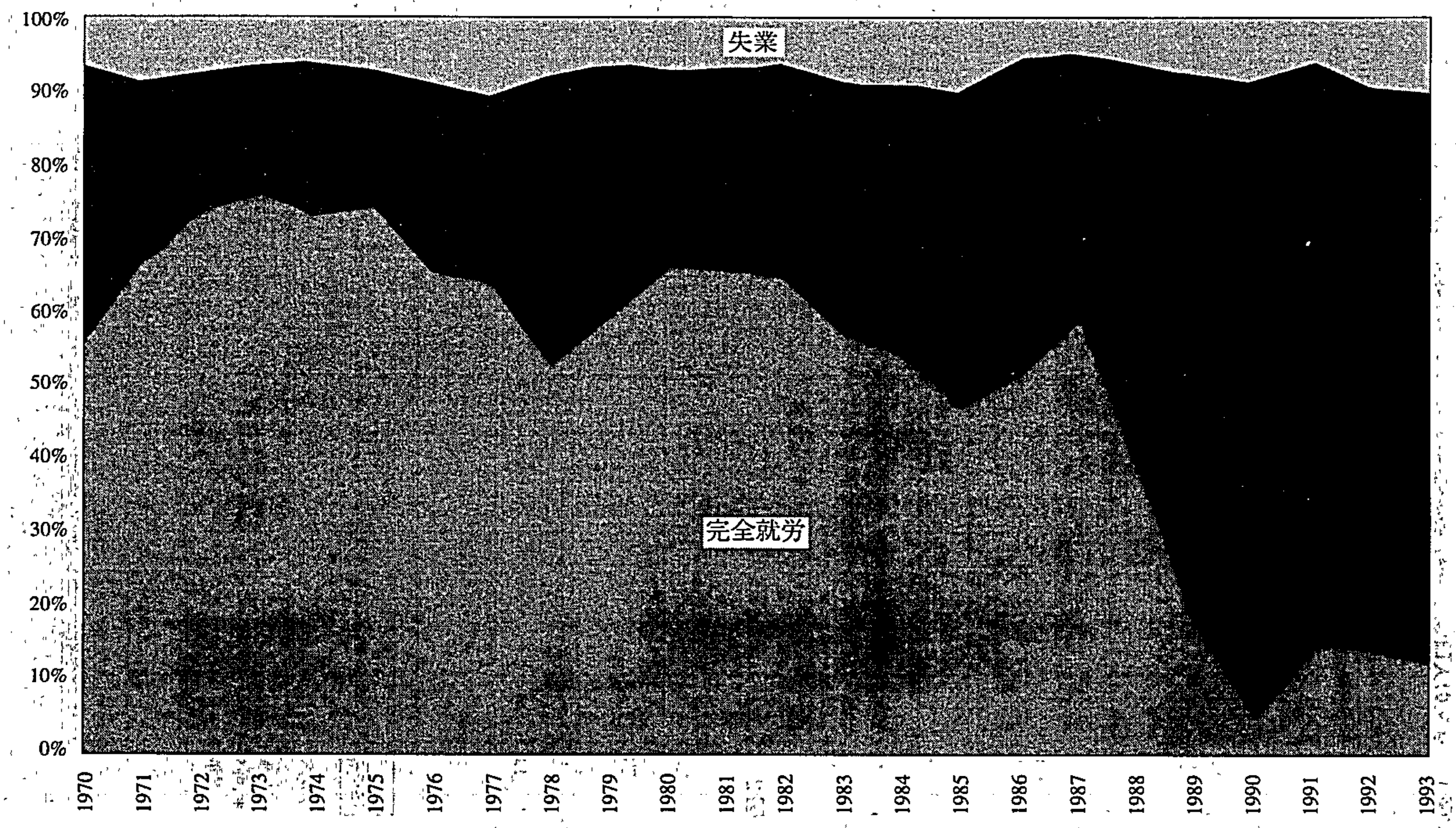


図４　雇用状況と就労部門

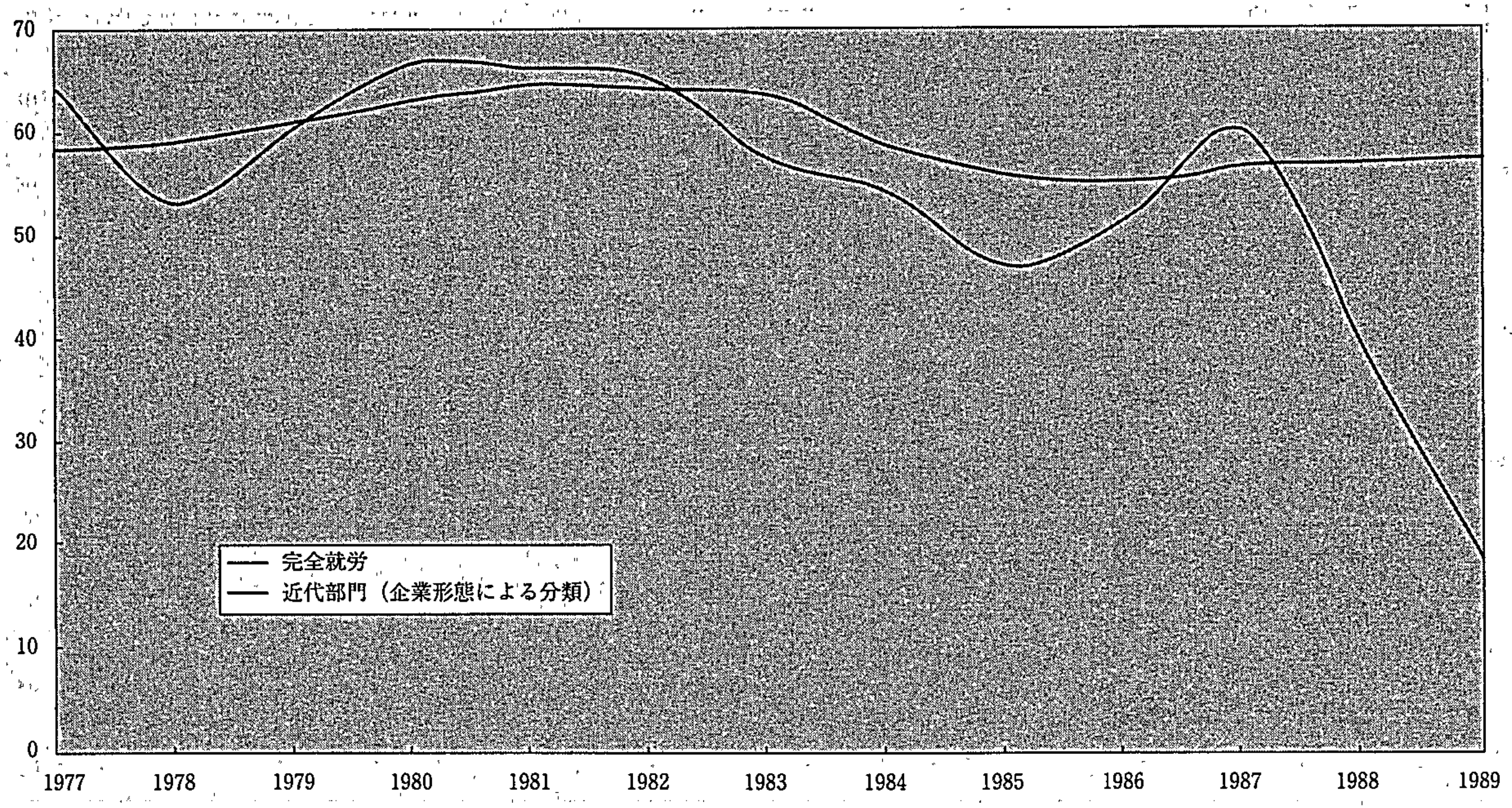


図５　潜在的就労を含めたＩＳ人口

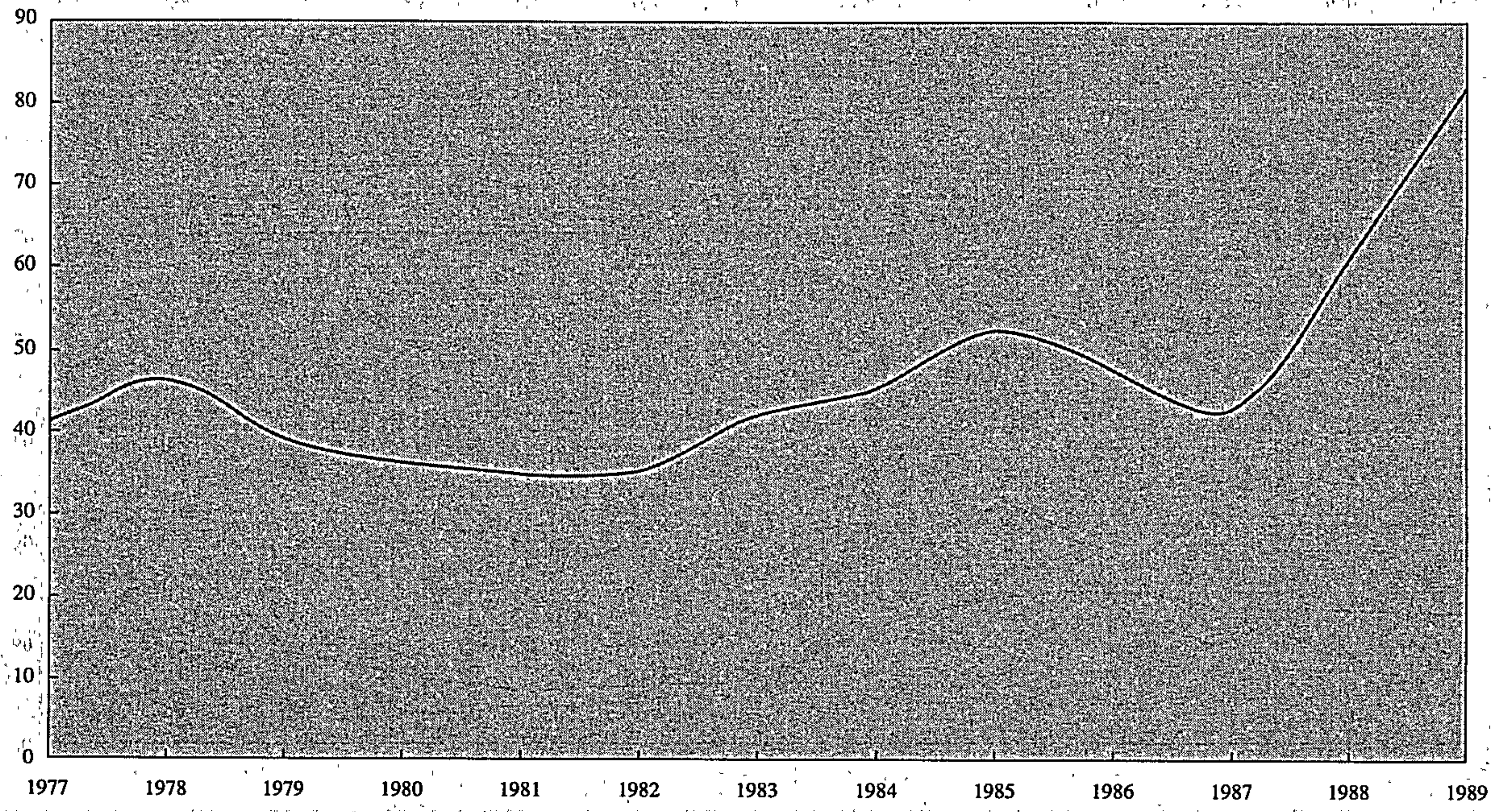


図6　インフォーマルなマーケットプレイスの変化

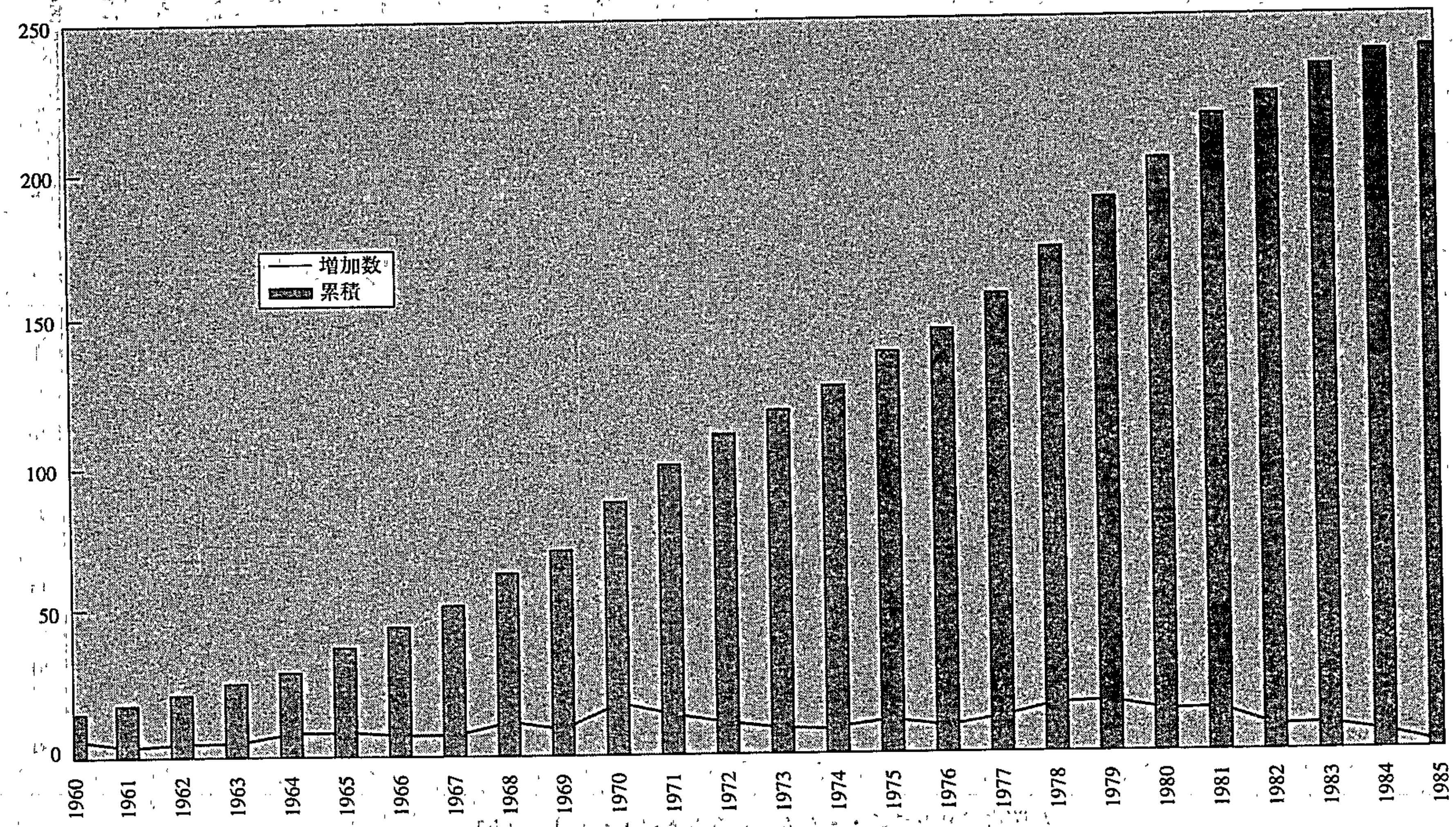


図７　インフォーマルなマーケット・プレイスの増加数

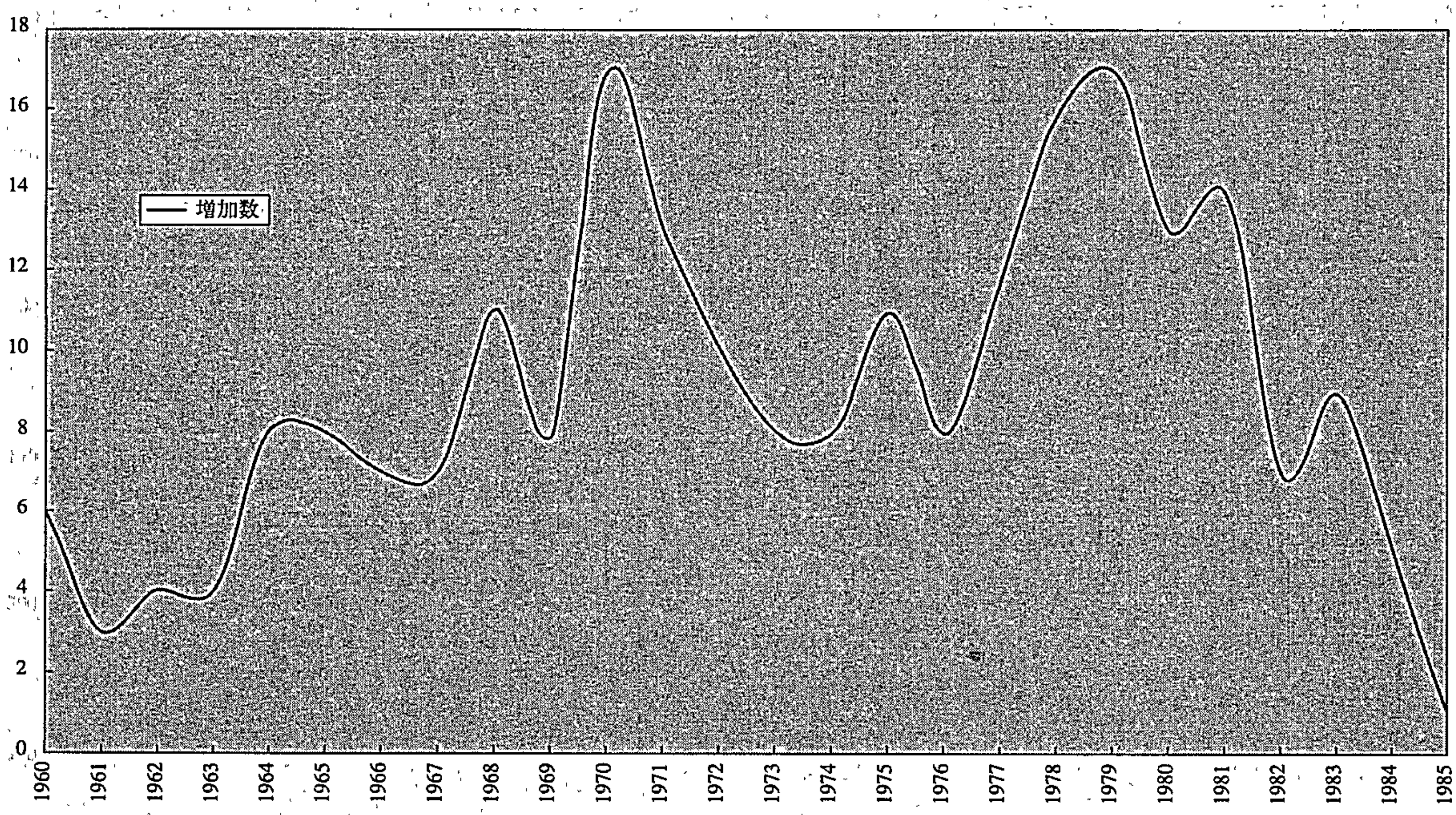
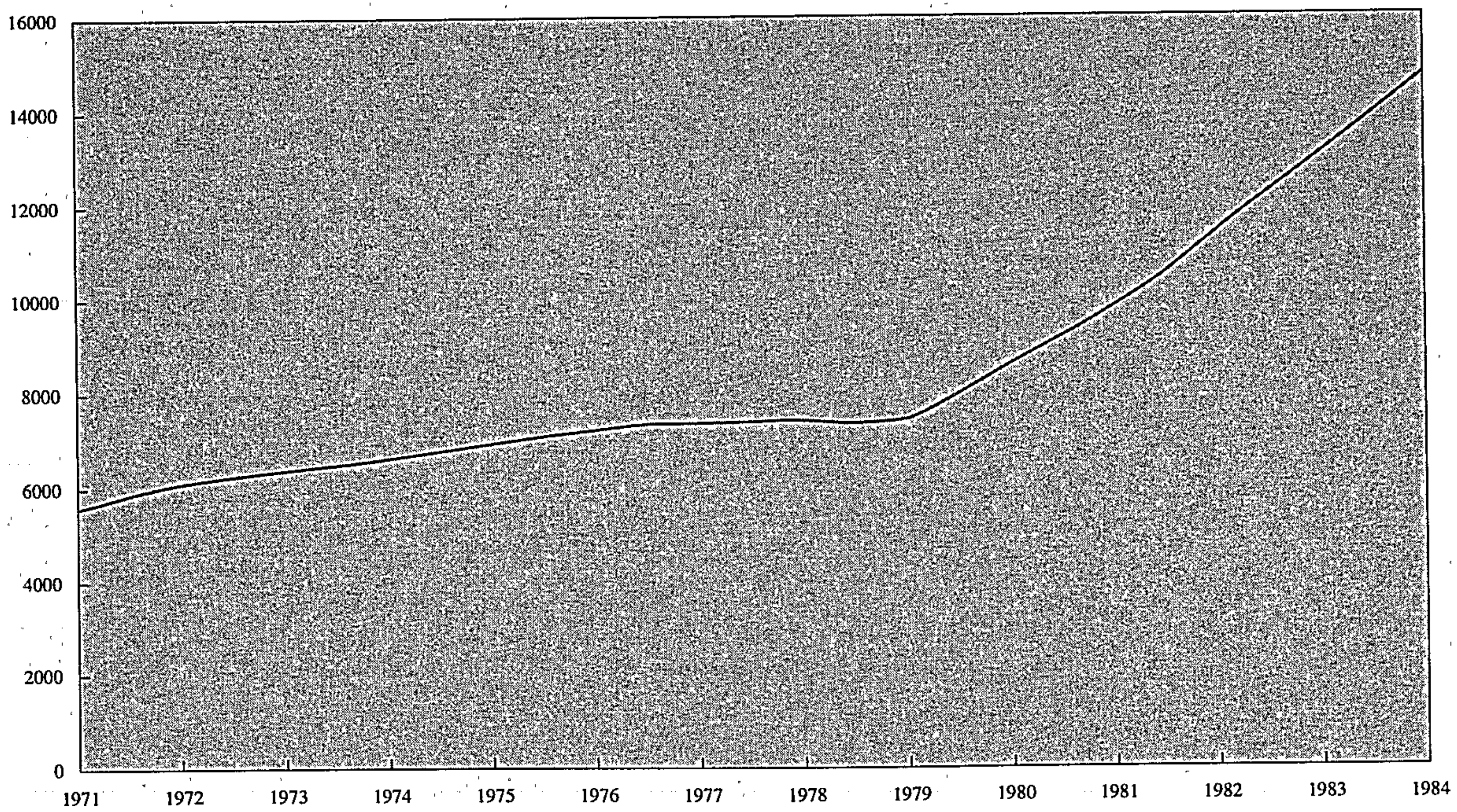


図8　インフォーマルな交通機関



LIB